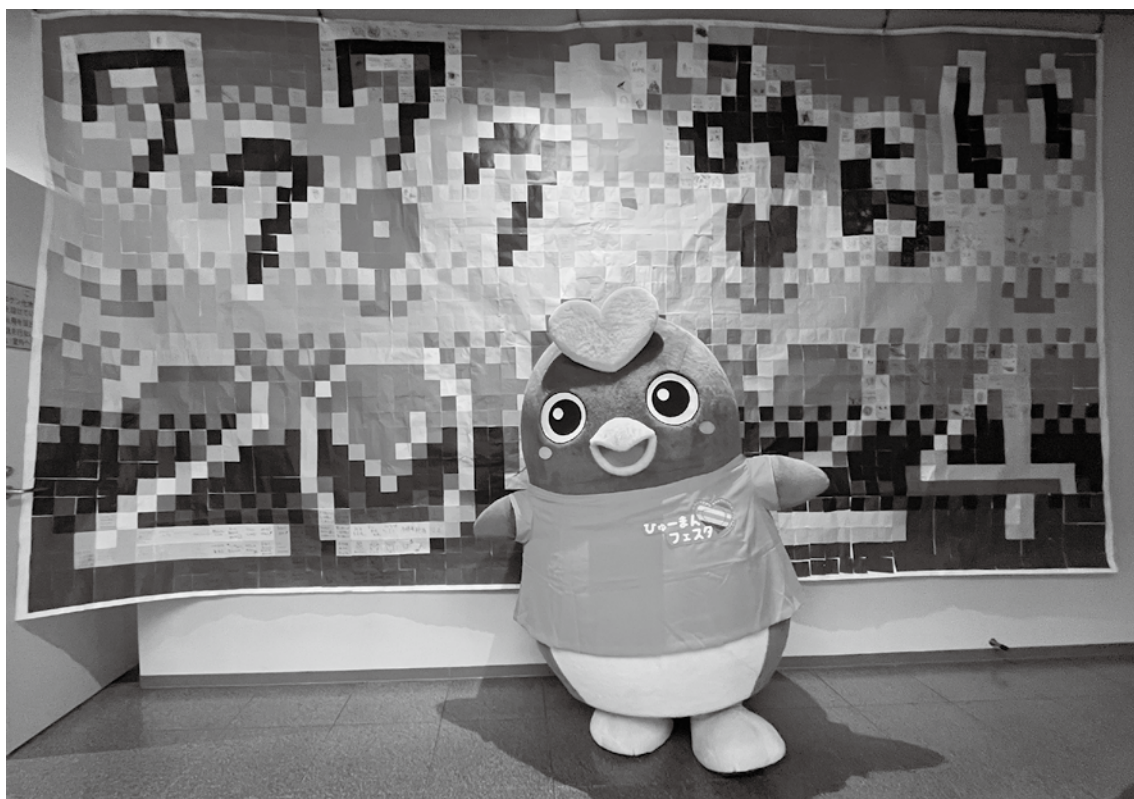


ちいき人権 World

発行
2024年度 冬号 (No.117)

発行：世界人権宣言八尾市実行委員会
委員長 土田 紀康
連絡先 TEL 072-924-9853
FAX 072-924-0134
編集：「ちいき・人権・World」編集委員会



ひゅーまんフェスタ 2024 でみんなで作ったモザイクアート。折り紙を貼り合わせて1つの大きな絵になります。1枚ずつに書いてるメッセージもすてきです。

も く じ

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 2 P..... ひゅーまんフェスタ 2024 報告 | 9 P..... 身近にいませんか？やめられない人たち |
| 3 P..... 映画上映会「ヒゲの校長」 | — 依存症かな？どう支援をしたらいいんだろう— |
| / インターネット上の人権 若者と SNS | 10 P..... 出会いを楽しんで…part 1 |
| 4 P..... 報道と人権 | 11 P..... 人権週間街頭啓発 |
| 5 P..... 子どもの権利をまもるには… | / 人権週間ひゅーペン缶バッヂ配布 |
| 6 P.. 第47回みんなのしあわせを築く八尾市民集会 | 12 P..... 白根さんと考えよう！世界の人権51 |
| / 大学生の意見交換会 | 13 P..... うーさんのおすすめ本 |
| 7 P..... 令和6年度戦争遺跡めぐり | / じゃりちえ日記 |
| 戦争遺跡を見に行こう | 14 P..... 気ままにおしゃべりシネマ59 |
| 8 P.... トッカビワッタ（甞た）ガッタ（甞た）の | 15 P..... 勝手にきやらふる 81 |
| 50年を祝う集い | 16 P..... まちがいさがし / インフォメーション |



ひゅーまん 23rd フェスタ 2024

今年も無事に開催することができました。八尾市立小学校3校の子どもたちの参加もあり、楽しく人権を知るいい機会になったかと思います。誰もが人権をあたりまえに持っていることを、ひゅーまんフェスタを通して考えていただけたらと思います。2日間、ご来場いただきありがとうございました！

**11月15日(金) 16日(土)
開催しました！**



和太鼓の演舞



ヒップホップ
ダンス発表



1階の様子

恒例のさをり織り
今年は4m

用和小学校4年生、八尾小学校4年生と高美小学校3年生が遊びにきてくれました。



世界各地の楽器に
触れてみよう！



ゆったり
遊んだね♪



劇団どろっぷ

ポッチャで
遊ぼう！！



出かけてみよう！
笑顔あふれるつどいの広場



ディスコンで楽しく遊ぼう！障がい者と共に▲



じんけん作品
展示会

ウリカラゲモイム



こどものための
プレイパーク

次回は2025年11月14(金) 15日(土) プリズムホールで開催します。ぜひ遊びに来てください。

第1回人権啓発映画上映会 映画ヒゲの校長

ひゅーまんフェスタ開催に合わせ、以前より熱い要望のあった映画上映会を行いました。

「ヒゲの校長」と呼ばれたのは、手話を排除し口話法を推し進めた大正時代の聴覚障害者教育のなか、手話教育を守るために奮闘した大阪市聾啞学校の高橋潔校長です。口話教育だけでは、ろう者一人一人の個性に応じた適切な教育は不可能であると奮闘の実話でした。

そういった歴史的背景も踏まえ、2011年に改正された障害者基本法3条では、手話は言語であると明記され、地域社会における共生が目指されています。

八尾市で手話言語条例の制定に向けて学習を続ける多くの皆さんの参加があり、会場は立ち見も出て、11月とは思えない熱気に包まれました。

た。参加者に向けたシールアンケートが行われたり、上映後のろう者によるアフタートークでは、世代によって受けた教育の違いなどのお話を聴くことが出来ました。

参加者から寄せられた感想より

- ・口話法でろう者がここまで苦しんでいたことがまったくわからなかったの、ろう者の声を消さずにお互い支えられるようにしたいです。
- ・手話が抑圧された時代の中で粘り強く教育に取り組んだ人々の苦労や喜びが大変よく描かれていた。



第1回人権啓発セミナー

「インターネット上の人権 若者と SNS」が開催されました



講師：認定NPO法人D×P理事長
今井紀明さん

数字からみるD×Pの活動報告から、大阪「グリ下」に集まる若者の現状や課題が良く分かるお話でした。街中アウトリーチ事業でフリーカフェで若者と出会い、声を聴くことで、親からの暴力や学校のしんどさなどの経験から、若者のニーズにアクセスして支援する様子が伝わってきました。若者と一緒に安心な居場所(ユーズセンター)を作っていく取り組みは、食事支援などと合わせて若者の命綱になっており、そ

の広がりSNSが大きな役割を果たしているとの事でした。SNSの悪い危険な側面ばかりでなく、アクセスしやすいSNSでSOSが出しやすいことや、情報の拡散力はよい一面であるとも言えると感じました。ユース世代の活躍が利用する若者にとっても安心の一助となっている事がわかりました。

(参加者の感想から)

- 支援の一つ一つがとてもきめ細かで子どもの声や願いを本当によく聞いておられるなど感動しました。1つ1つ丁寧で時間のかかるお仕事をされていると思いました。ナイトユースセンター応援しています
- 普段の生活で気づかなかったのですが、日本で貧困のある若い子が多いこと、あらためて感じました。
- 見えない貧困がこんなにあることを知りました。男性の相談が低い現状を知りました。

第2回八尾市人権啓発セミナー

「報道と人権」が開催されました

第2回八尾市人権啓発セミナー「報道と人権」が、12月12日、八尾市文化会館プリズムホール小ホールで開催されました。（主催：八尾市、受託運営：八尾市人権協会）

講師は、河野義行さん。ご存知の方も多いと思いますが、30年前の1994年に起こった松本サリン事件の被害者であり、第一通報者です。同年6月に自宅近くでサリンを噴霧されたため、妻が心配停止になり、自身も重症を負い、子ども2名とともに入院し治療を受けることとなります。しかし、第一通報者であったことで長野県警の家宅捜査を受け、それによってマスコミから容疑者扱いされ、瞬く間に“世間”から執拗なバッシングを受けることとなります。

河野さんからは、その当時何が起こりどのように対応されてきたのか、またそこかなら何を考えていかなければならないかを話していただきました。

河野さんは、「マスコミは、自分を極悪人にも描けるし、あるいは美化して英雄にもできる。例えば事件前と事件後、生き方も考え方もそんなに変わっていないが、事件が起こってこいつが悪い、という一つの方向性がとられると、とてつもない悪いヤツになってしまう。どこが悪いところはないかと探すわけです。こういうことも、ああいうことも。その結果、だからこいつは悪いヤツなんだ、変なヤツなんだとなっていくわけです。」逆に河野さんが事件に関与していないことが明確になると、「全く逆転するわけです。とてもいい人になってしまう。だから、わたしはマスコミというのは、本当は中立ではなくて、人に対する評価は偏っていると思っています。」

そのようなマスコミ報道の結果、完全に犯人視された河野さん宅には、数え切れないほどの



非難電話や手紙が送り付けられることになりました。

事件から30年。今なお、メディアの報道のあり方が問われ続けています。河野さんのように犯人として扱われた側から、犯行をやっていないことの証明ははとて難しく、メディアの偏った報道を、いかに適切に情報を読み解くのが問われているのではないかと思います。近年はSNSの影響もあり、より一層、人権の視点にたったメディア・リテラシーが求めていることを考えさせられるセミナーでした。

（参加者の感想から）

- 貴重なお話を聞けました。お互いの人権を守っていくことの大切さ、学びました。
- 30年前の松本サリン事件での出来事の「メディアの片寄った報道」は今SNSの発信により「個人の片寄った拡散」に移行してきているように思う。どう責任をもつのか？考えないといけないと思った。過去の事件から学ぶべきことは大きいので。
- 犯罪被害者が無実を勝ち取ることが、どれ程大変わかりました。報道にまどわされた方も後悔することになることがわかりました。
- その人が犯人ではなくても報道なりうわさなりの中で矢面にたたされた時点で、その人の人権がなくなるこわさを思い知らされた。

2024 年 11 月 23 日 八尾プレイデイ 2024 開催

「子どもの権利をまもるには、」

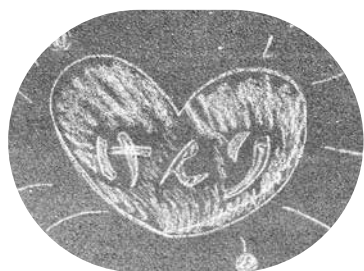
NPO 法人 KARALIN 松田直美

11 月 9・10 日に東京で開催された「子どもの権利条約フォーラム」で、先駆的なセーフガーディング基準が取り入れられました。写真などの撮影も厳しい基準で規制され、参加する大人は、「子どもの権利を侵害することをしません。」というような誓約書を書き、通報窓口もできました。最初は「厳しいな～」と思っていたのですが、二日間参加してみて、例えば大きなホールで舞台に向けてスマホを構えている参加者がいないのはすごく新鮮で、これが当たり前になったらいいなと思いました。ちょっとした心動くシーンに遭遇するとすぐにスマホに手が伸び、「あ、そうだった！」と反省することが何度も。体にしみついているなと思いました。

まずは、身近なことで子どもの権利について考えるきっかけになったら良いと思い、今回のプレイデイ開催前に法人として「子どものセーフガーディング」を意識するために、次の宣言をしました。まずは法人のメンバーやスタッフ、ボランティアの方にお知らせしました。

おとなは・・・

- 1、子どもを一人の尊厳ある人間として扱い、大人は力ある立場であることを自覚し、力を濫用しません。
- 2、子どもはとりひとり、人格と個性を持つ存在です。子どものニーズを理解し、良かれと思つての余計なことをしません。
- 3、子どもと自分の心と体を守る言動を意識し、バウンダリーの侵害をしません。



- 4、自分の中にあるジェンダー規範に気づき、人権規範で人との交流をするように心がけます。



そして、プレイデイ当日に向けて、出店者や参加者にも SNS のお願いをしました。

八尾 PLAYDAY2024 SNS のお約束

楽しく便利な SNS ですが、使い方を間違えると、誰かを傷つけてしまうことになります。

- 1、誰がどこにいるか、いたかは、その人の個人情報です。映り込みにも注意してください。
- 2、子どもは無料コンテンツではありません。勝手に子どもの写真を撮ったり、SNS にアップしません。必ず本人や保護者の同意が必要です。

SNS の正しく有効な活用をお願いしました。最近の社会的な事象で言えば、ネットを使った人権侵害も多く、特に AI の躍進的発達で写真や動画を悪用したディープフェイクによる被害が増加しています。その危機管理もおとなが子どもに伝えていかないといけないと思っています。

子どもの遊びを中心に楽しい 1 日を過ごすためにも、人権基盤での企画運営や準備や意識確認が、少しずつ社会的な規範も作っていけるのではないかと感じた出来事でした。

第 47 回

みんなのしあわせを築く八尾市民集会

八尾市人権啓発推進協議会では、人権尊重の精神に基づき、例年実施している「人権啓発映画上映会」や、各地区福祉委員会で実施している地区人権研修など、全市民を対象にした人権啓発事業を実施しております。

今回は、人権について考えていただく機会にするため、「第 47 回みんなのしあわせを築く八尾市民集会」を開催しました。

国境なき芸能団代表の笑福亭鶴笑さんに世界各国での落語公演実績をもとに笑いを交えてご講演いただき、世界平和について考えていただく機会となりました。

日 時：2024（令和 6）年 11 月 15 日（金）

14 時 ～ 16 時

テーマ：世界平和

講演タイトル：地上に平和を人に笑顔を

～笑いは世界の共通語～

講 師：笑福亭鶴笑さん（国境なき芸能団 代表）

場 所：八尾市文化会館プリズムホール

地下2階 小ホール



（参加者アンケートより）

- ・国境なき芸能団に感謝です。各国キャンプに訪問され、続けられますよう祈っております。鶴笑さんありがとうございます。
- ・大変いい集会に参加出来たこと、感謝します。今後もこのような機会があれば参加したいです。
- ・国境をこえて「笑い」は通じるのだ！ということが落語や DVD を通じてよくわかりました。日常にもっと笑いを意識していかないと！と思いました。紙切り、私にもできるかな？

- ・笑顔で幸せになってほしい。いい落語で心がうたれました。
- ・非常に楽しい時間でした。自分に出来る事で平和・人権尊重のまちにしていきたいです。
- ・すばらしい落語でした。感動でした。笑いをとおこして涙があふれてきました。
- ・こういった活動があることを知り、とてもうれしく思いました。ありがとうございます。



大学生の意見交換会

（フューチャリングアイディアソン

～未来を創ろう3～）



令和 6 年 11 月 12 日（火）に、包括連携協定を結ぶ阪南大学の 1 ～ 3 回生の年齢の違う 36 名の学生に集まっていただき、意見交換会を開催しました。

前半では、どんな困り事があるか。困りごとを抱えた時、どのような場所・人に相談しやすいかをグループごとに議論しました。

後半では、ボランティアセンターの方に講師をしていただき、ボランティア活動について話をしていただき、自分の好きなこと得意なことをどのようなボランティアに活かせるかについて学生同士で考え、発表しました。

ボランティアは、「助ける側」「助けられる側」という考えではなく対等な関係であり、海外では、ボランティアは“Pass me the salt（お塩と

って)”と、近くのお塩を渡すくらいの気軽に気持ちよくできる行動がボランティアの始まりだそうです。

自分や誰かが困ったとき、どう行動するか、自分の得意を活かして何ができるかを考え、意見交換会の後3か月間、自分なりに意識することを決め、そのテーマについて具体的にやってみようと思うことを発表しました。共に意見を出し合い考えることで様々な気づきや、参加者同士や八尾市との繋がりを深める機会となりました。

<参加者の声>

- いろいろな意見交換をすることで自分の考えつけないところも視野に入れることができた。
- ゼミの先輩に関わる機会が出来、自分の意見を言う機会は就活の時にグループディスカッションをする際に役に立つと感じた。
- ボランティアはハードルの高いものだと思っていたけど、自分の好きなもの、得意なことから始められると知ったので興味を持ちました。など

令和6年度戦争遺跡めぐり 戦争遺跡を見に行こう

令和6年度 戦争遺跡めぐり

実施日：令和6年11月30日（土）9時～13時

コース：①自衛隊八尾駐屯地内

旧戦闘指揮所・広報展示室

②志紀町西公園 作戦室跡 ③掩体壕

④府道八尾枚方線 ⑤本町二丁目付近

八尾市では、昭和58年に「非核・平和都市宣言」を行い、それ以降様々な平和事業を実施しております。平成25年（2013年）には、非核・平和都市宣言30年を記念いたしまして、冊子「戦争の記憶～伝えたい平和の大切さ～」を発行しています。その編集には、八尾市観光ボランティアガイドの会 大西 進さんに携わってい

ただいています。その記念誌を活用した平和事業として、平成26年（2014年）から「戦争遺跡めぐり」が始まり、大西さんには長年ガイドを務めていただいております。

大西さんは、八尾市内に残る戦争遺跡を長年に渡って調べてこられ、多くの戦争体験者からの聞き取りをされておられる方です。その豊富な知識を、ガイドを通して、多くの方に伝えていただいております。

戦後80年を目前とした今年度は、定員20名に対して約60名の応募があり、急遽定員を40名に増員して実施いたしました。



（参加者アンケートより）

- ・大西さんの説明がとても詳しく、参加してよかった。
- ・八尾にある飛行場の歴史を学習出来て、よかった。
- ・初めて八尾市に戦争遺跡があることを知った。色々と考えさせられた。
- ・自分の身近なところにある戦争遺跡を見学し、平和の大切さを実感した。
- ・平和のために、戦争遺跡から学ぶ機会を増やしてほしい。
- ・平和の尊さを再認識できた。
- ・掩体壕が元々はもっと大きかったことを始めて知った。

トッカビ設立50周年記念イベント

「トッカビワッタ(왔다)ガッタ(갔다)の 50 年を祝う集い」



世人やお加盟団体である NPO 法人トッカビは、昨年、1974 年 10 月の設立から 50 年を迎えることになりました。これまでご支援いただいた皆さまに感謝をこめて、11 月 22 日に記念イベントを開催しました。イベント名のワッタ(왔다)ガッタ(갔다)は、韓国語で行ったり来たりという意味です。在日コリアンから始めた活動も、現在では多様な外国ルーツの人たちが増加する時代をむかえ、設立当初は突き進み続けてきたことも、時には立ち止まり、立ち返りしながら 50 年の活動に繋がったとの思いで付けられたイベント名です。

トッカビは、1974 年に在日コリアンの子どもたちが自らのアイデンティティを確立し、差別や偏見に立ち向かう力を養うために設立されました。日本社会において在日コリアンが人としての尊厳を否定され、その影響で自らも否定し、日本人のように生きざるを得ない状況に直面してきました。トッカビは、そのような社会の不条理に立ち向かい、コリアンの子どもたちが「人としてありのままに生きられる」社会を地域から築き上げることをめざしてきました。

1990 年代に入ってから、新たに外国にルーツを持つ子どもたちとも共に活動を進めてきま

した。彼らが名前に対するからかいや侮蔑、「中国帰れ」あるいは「ベトナム帰れ」と言われた経験を通じ、高校入学時から日本名を名乗り、自らのルーツを隠すようになっていく姿を見るたびに、この社会における外国人に対する差別の現実が、トッカビ設立当初から何も変わっていないことを痛感させられたからです。

私たちの取り組みや活動のスタイルは変化してきましたが、在日コリアンから始まり、中国、ベトナムなど他のルーツを持つ人々をも対象にしてきたことは、トッカビ発足当初の思いが基底にあります。

50 年は大きな節目であります。これからも、日本に住む「外国人」が「人としてありのままに生きられる」社会を地域から築き上げるため取り組んでいきたいと考えています。

イベント当日は、多くの皆さんにご参加いただきました。世人やおにかかわる団体の皆さんもご参加いただき、本紙面をお借りし改めて感謝申し上げます。これからも世人やお加盟団体の皆さんと連帯していきながら、トッカビ活動ポスト 50 年を進めていきたいと思ひます。



世人やお前実行委員長の荒木節郎さんが乾杯の御発声



トッカビ中学生有志による韓国プチェチュム(扇の舞)



KARALIN の皆さん、綺麗な花をありがとうございました

令和6年度市民大会

身近にいませんか？やめられない人たち —依存症かな？どう支援をしたらいいんだろう—

一般社団法人 Green
障がい福祉サービス事業所 café ROWAN
河 昭子

さる12月21日（土）、八尾市精神保健福祉協議会の令和6年度市民大会が八尾商工会議所大ホールにて開催されました。

今年度のテーマは「身近にいませんか？やめられない人たち —依存症かな？どう支援をしたらいいんだろう—」。基調講演として籠本孝雄先生（大阪府心の健康総合センター特別職非常勤・大阪精神医療センター名誉院長）から「ギャンブル依存症について考える」、阪元紀子さん（全国ギャンブル依存症家族の会）から「家族としてできること」として体験談を伺いました。

基調講演で籠本先生が強調されたのは、「ギャンブルはコントロールすべきこと、コントロールできるはずのこと」ではなく、「依存症は自分ではコントロールできないコントロール障害の病気（慢性かつ進行性の病気、強迫的ギャンブラー）」との認識が大事であるということ。そして依存症の治療、回復支援に大切なことは依存症を「病気」と正しく理解し、ギャンブル依存症を責めたり、無理にやめさせようとしてはいけないということでした。医者がうつ病患者に「元気を出せ」と強要したり、統合失調症患者に「幻聴が出たのはけしからん」と責めたりはしないのと同じという例えは理解しやすかったです。

ギャンブル依存症の治療薬はなく、治療者の最も有効な役割は困っている患者に寄り添い、時間をかけて本音を言える信頼関係を育てていくこと。変わるかどうかは患者自身の問題であり、信頼関係のないまま患者を変えてやろう、治してやろうとすることは患者のコントロール

（支配）になるとのことでした。

続いて阪元さんからは、発達障害をもつ息子さんがギャンブル依存症になってから現在に至るまでの経緯を伺いました。阪元さんが相談をした「ギャンブル依存症問題を考える会」では、回復を始めるために家族が①借金のしりぬぐいをしない、②金銭管理をしない、③干渉・監視をしない、④病気を理解する、⑤察しようとしないう、というアドバイスを行っているそうです。家族会など自助グループに参加することで辛い思いを共有したり、困難なときの対応の仕方を学ぶことができるという話が印象に残りました。阪元さんは昨年7月に八尾でギャンノン（ギャンブル依存症の家族友人のための自助グループ）を立ち上げ活動されています（下記参照）。

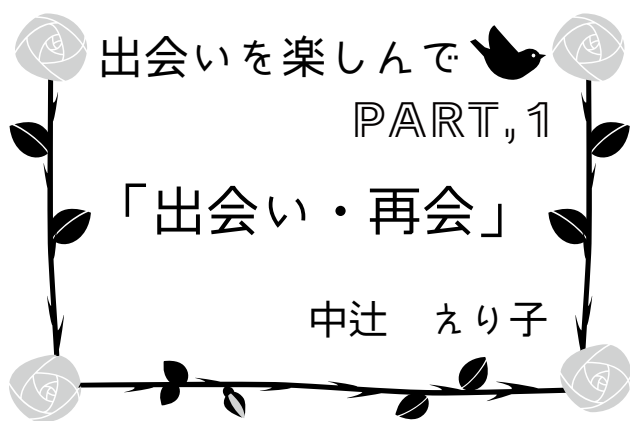
ギャンブル依存症は障害福祉の分野でも問題になっており、ギャンブル依存症者の4分の3が発達障害をもっているとの調査結果もあるそうです。また昨今のギャンブル依存症問題として、手軽にできるオンラインのギャンブルによる若年層の増加や闇金、闇バイト、凶悪犯罪などが挙げられており、現在のネット社会では誰にとっても無関係なことではないのだと感じました。

*大阪府依存症ポータルサイト www.oatis.jp

*ギャンブル依存症問題を考える会 <http://scga.jp/>

*ギャンノン大阪八尾ステップグループ

https://www.gam-anon.jp/group/05_27osaka#h.6tjfo1m55tmo



元旦の朝、俳優の堤真一と上白石萌音が声で案内する「四国お遍路旅」を放送していました。四国八十八カ所を歩いて巡る旅です。TVに釘付けになりました。私のふるさは高知県室戸岬。入口から空と海が見える洞窟「御蔵洞」（みくろど）は太平洋に向かって岬の突先にあり、弘法大師が修行し、その後空海と名乗ることになった地なのです。山上の24番札所御最崎寺（ほつみさきじ）の御住職の説明とともに空から海からの室戸岬が大きく映し出されていました。四季を通じて四国を巡るお遍路さんの中には若い男性や外国人の姿も。地元の方達と交流の様子は子供の頃からの記憶に残る風景でもありました。

TVの前で深呼吸をするような気分にもなっていた元旦。夕方には驚きのニュース報道が飛び込んできました。震度7の能登半島地震です。日本列島の日本海側全域に津波警報が出された後、翌日その後になっても、被害の全容が分からない状況が長く続きました。そして復興に向けて動き出していた9月には集中豪雨で重なる被害にも見舞われました。

8月8日。室戸岬への海沿いの道を高速バスに乗り帰省中に娘から「お母さん。海、大丈夫？」と連絡がありました。宮崎沖で地震が発生したということです。「前にもあったけど、離れているから大丈夫。」と答えましたが、バス到着後運転手さんからは「地震注意報の連絡が入ったが、走行を続けていた。」と聞きました。田舎の家の鍵を開けると同時にスマホからは大音量で2回続けてアラートが鳴りました。南海トラフに係

る地震だったのです。室戸岬には10cmの津波が到来。その後、室戸市からは市内数カ所に避難所を開設していると緊急放送も。高知県は太平洋に面した四国の南側にあり、南海トラフ地震発生の危険性は常にあることで、100mも離れない距離でも海と反対側の山側への避難路が作られ、町中には避難タワーが建設されています。帰省の日常では目にしている、現実にくいつ起こるかわからない状況の中で、滞在中1週間は毎日緊急放送が続き、ラジオはつけたままにして、持ちだせる荷物と懐中電灯を身近に置いて過ごしました。空き家が増える故郷です。気にかけてくれる近所の方はいつもより多く訪ねてきてくれました。高知市内に住んで離れていても実家があり会いに来てくれる幼馴染がいます。おしゃべりの時間はいつもより短くなりました。

4月。地域の高齢者ふれあい給食の食事会「あけひがランチョン」は4年振りの再開でした。R2年2月からの新型コロナウイルス感染と感染症の拡大防止のために休止の状態が続いていたのです。特に、食事会はおしゃべりをしながら食事を楽しむ機会です。活動休止の期間に参加の高齢者だけでなく、給食ボランティアの私達も年齢を重ねました。どんなふうに再開しているか不安の中、3月には地域の広報で開催を知らせて、ボランティアには班ごとに参加継続を確認すると「ランチョンに参加します。」（「もう、ボランティア活動は卒業して、高齢者として食事会に参加します」）他で、班活動の縮小ともなりました。3月は役員6人だけの活動で、調理器具や食器を確認し、参加人数に対応できるカレーとサラダ・果物の献立で試食会を行って準備を整えました。

「あけひがランチョン」再開の4月21日（日）。曙川東地区集会所の調理室では私達役員6人で40人分を予定して調理を始めました。天候は小雨から雨に変わっていききました。民生委員さん達が会場内を準備してくれて、12時の会食時は16人の高齢者の参加があり、会話が弾んでいました。実際に食事をしたのはボランティア含め

26 人でしたが、食後は「おいしかった。」「家でカレーは作れないのでうれしい。」「4 年振りのランチョン再開が待ち遠しかった。」「90 歳になったけど、元気です。」等、うれしい言葉が聞けました。5 月からは班活動再開で、皆年齢を重ねましたが、今は 60 食の献立作成と調理が続けられています。

集まる機会がある・話し合い助け合って活動できる仲間がいる<食べることは生きること>の活動でもあり、力が湧いてくるのを感じます。「いつまで続けられるかなあ。」ではなく、続けていたいなど。…出会いを楽しんでいきたいと思えます。

(前号の祭り風景記載に誤りがあります。神立のふとん太鼓が神輿を先導して進み、引継ぎ場所で待っていたのは大竹のふとん太鼓です。大変失礼致しました。訂正してお詫びいたします。)



人権週間街頭啓発

今年も人権週間初日となる 12 月 4 日、近鉄八尾駅、河内山本駅、JR 八尾駅、JR 久宝寺駅の 4 駅で、ポケットティッシュ等の人権啓発グッズ配布での街頭啓発を実施しました。世人やおは、例年 JR 八尾駅を担当しています。通勤・通学等で駅にむかう多くの人たちに受け取っていただきました。

<JR 八尾駅前での様子>



今年も人権週間ひゅーペン缶バッジを配布しました！

八尾市立小学校 1 年生全員に人権週間啓発オリジナル缶バッジを配布しました。一部学校へは直接ひゅーペンが届にきました。



長池小学校



南高安小学校

白根さんと考えよう! 世界の人権51

国際NGO「CCPR センター」「ISSYO」所属 白根大輔

4年ぶりのインド訪問

2024 年末、南インドのタミール・ナドゥ州の州都チェンナイ近郊の農村部でダリットをはじめとするマイノリティ女性の自立運動を行うパートナー団体、ACMSA を 4 年ぶりに訪問することができました。久しぶりに訪れたチェンナイの街は思った以上に開発が進んでおり、チェンナイ市内から農村部へ向かうハイウェイも整備が進み、以前よりも移動が容易となっていました。ハイウェイ沿いには大きな工場や家屋、店が増えていましたが、そこから逸れて農村部へ入ると、まだ開発の進んでいない、4 年前と同じ風景が広がっており、時間の流れが急にゆっくりとなったように感じました。

そこで久しぶりに再会した女性の一人、アシャ（仮名）はカースト差別やダリットの人権、ダリット女性の自立等に関してパフォーマンスを通して啓発を行うダリット文化グループのリーダーを長年務めた女性です。公立学校に通いながら運動に参加し、公立大学卒業後も近隣の工場で仕事をしながら、結婚をきっかけに文化グループを卒業するまで 10 年以上に渡り活動を行ってきました。初めて出会った頃は 10 代前半だった彼女は、今や母親となっていました。結婚後も度々 ACMSA の会合にも来ています。

アシャは就職先で出会ったダリットではない男性と、現地では滅多にない、カーストを超えた恋愛結婚をしました。ダリットに対する差別

や偏見は未だにあり、彼女の家族や親戚はダリット間の見合い結婚を進めていましたが、相手の男性はカーストやアシャがダリットであることは全く気にせず結婚を望んでおり、彼の両親もそんな二人の希望を理解し、結婚の承諾をしていたので、両家族同意のもと、二人は結ばれました。しかし結婚式やその他、相手側の親戚が多く集まる際などは、差別や偏見を避けるため、彼女がダリットであることを黙っていた方が良いと言われていました。

ダリットであること、自分が自分であることに誇りを持ち、長年の文化活動を通して、ダリットの人権、人々の差別意識を変えるために運動をしてきたアシャです。結婚し、活動から離れた後も、そこで得た知識や経験を自らの生活の中で活かし、様々な場で可能な限り声を上げてきました。だんだんと周囲の理解も深まってきましたが、未だにダリットであることを隠せという人々もいること、諸々の事情を考慮すると結局隠さざるを得ない社会の状況が残っていることなどを、4 年ぶりに話した彼女は自らの経験から語ってくれました。

インド全体で経済や開発、技術の発展が進み、ダリットの人々の状況も都市部と農村部の差こそあれ、多少なりに変化してきましたが、ダリットや女性に対する差別や偏見は未だ根深く残っています。アシャのようにダリット女性として声を上げることがよく思わない人も多くいますし、そういった行為に対する報復もあります。みんながみんなアシャのように差別に立ち向かえるわけではありません。カースト差別や女性差別は未だ大きな壁ですが、ダリット女性、マイノリティ女性の一人一人を支えながら、ACMSA は地道に、その場に根付いた活動を行っています。4 年ぶりの ACMSA 訪問はこの場では伝えきれない学びや発見がたくさんありました。同時にこの ACMSA の人たち、運動に加わるダリット女性と一緒に部落に行きたいと心底思いました。



女脳・男脳って聞いたことがありますか？一時ブームになっていたのですが、記憶にある方もいるでしょう。今回は、その女脳・男脳から派生する性差について、心理学・脳神経科学をベースにしたデータから読み解いている本を紹介します。

全体的な頭の良さには性差がありません。空間認知の一部の能力や攻撃力は、少し性差が認められています。その他の部分はあまり性差がないようです。

でも、それ以外にも性差があるのでは、と思う場面もありますよね。

生まれた時に心の性差がほぼないなら、幼児期から発達の過程のなかで何が起きているのでしょうか。何が要因で年齢とともに性差がひろがるのでしょうか。

例えば、あなたが保育スタッフで、初対面の男の子と遊ぶ場面を、想像してみてください。あなたは、その子にどんなおもちゃを持ってくるか？女の子だったら？性別を知らなかったら？

どの子にも変わらない人もいるかもしれませんが、おもちゃが変わった人もいます。おもちゃが変わったのは、男の子、女の子でおもちゃが違ふと思ひこんでいるからかもしれないです。

色々な場面でのおとなの思い込みによる行動がこどもたちの性差をつくっているかも、ということに気づかせてもらえる本です。こどもたちとの関わりや性別に関する考え方を見直すきっかけにもなりそうです。

つくられる子どもの性差
「女脳」「男脳」は存在しない
森口佑介著
光文社新書



じゃいちえ日記 VOL79

ふと思った事

年末になると、「喪中ハガキ」が届く。家族の1人かな？どうしているのかな、と思いながら、連絡、又便りが送れない私がいる。また、年賀状は送るようにしているけれど、毎年ギリでしている。

年1回の「年賀状」を大切にしたいという反面、2024年12月半ばに体調を崩したから、予定が狂ってしまった。

気候が、12月上旬まで暑かったり、朝晩の気温が寒かったりと「変な季節」になってきた。秋の良い気候はどこへ行ったの？と思う。それ

と、「生理痛」も病院に行くことができれば、少しは緩和されるのかな？

風邪引きと生理痛が「W」で来たもので、どうにもならなかった。その為、後に響いている。

今年はこれからの「世代交代？」仕事の事で、收拾がつかなかった。容量の悪さ、把握などが重なり「撃沈」していた。先回りにしていたつもりが、いつも後回しになりしんどい目に合う。やはり、年齢には勝てないという事だろう。今回、体調を崩して学んだことは、「躊躇なく」訪問看護さんに連絡できたこと、かかりつけ医を見つけられたことかな？でも、婦人科へにたどり着くのは、いつになるだろう。早く見つけたい。年末忙しい時に対応してくれて、感謝。

どこも人手不足は「深刻」。その中で、人材を増やしていくのは、どこの業界も同じだと思う今日この頃。

ままにおしゃべり シネマ vol.59



PLAN75(2022年 日本)
監督・脚本／早川千絵
主演／倍賞千恵子

E: 2022年には『メタモルフォーゼの縁側』っていう映画の公開もあって、どちらも夫を亡くして一人暮らしの70代の女性が出てくるんだけど、日本の同じ年頃の人たちの状況にはすごい格差があるってあらためて思った。

M: 生活保護を受けなくてもまだ頑張れると仕事を探す78歳のミツさん。急に解雇されて気丈に振る舞ってもカラダはね。年齢の壁は大きくて引っ越し先も仕事も見つからない。

E: いちばん堪えたのは一緒に解雇された同僚と連絡が取れないまま、孤独死を発見したことだろうね。近い将来の設定だけど超高齢化社会に国会が認めたという＜PLAN75＞という制度がある。反対する人もいるみたいだけど。

M: そうそう、市役所に申請窓口が用意されてて、75歳以上になると自分の生死を選べるという制度。この制度を使うと好きに使える一時金が支給されて、葬儀費用も死後の手続きも任せられる。となると、選ぶ人も出てくるんだ。やめたくなったらすぐに中止できるそうだけど、やっぱり生きることが難しくなった人が行き着くと思う。

E: 死を選択したら定期的にコールセンターの担当者と電話で話せて、安心してその日を迎えられるようにサポートしてくれる。けど、思い出話をしたら死にたくなる気がする。孤独で余裕がなくて、こんなに話を聞いてもらったこともないし。姥捨山の話は家族の食いぶちを減らすため、これは生活保護や介護費用をなくす社会のためなのか？！

M: 2025年は5人に1人は75歳以上と予想されてた、その時を迎えたね。75歳は現役で社会を支えてる人たちも多い。年金だけじゃ老後の生活はできないと政府が言ってるからね、それまでに蓄えよ、自己責任で、というわけか。

E: 成人のこどもと同居する高齢世帯や一人暮らしも多くて、子育て世帯はすっかり少数派。日本の平均寿命は世界一だけど健康寿命とすごく差が大きいんだって。延命治療はしたくないし誰にも迷惑はかけたくない。でもPLAN75はどうなんだろう。

M: うーん、病気以外で生死の選択って出来るかな、もう死んでいい、やりきったって思える!? 同じ75歳以上でも＜メタモルフォーゼの縁側＞のゆきさん(宮本信子)は、BL漫画でときめいて高校生のうらら(芦田愛菜)と友達になる。＜阪急電車＞では孫とおばあちゃん役だったね。

E: ゆきさんの場合はやがて海外に住む娘が呼び寄せる展開。ミツさんのように全くの独りじゃなかった。ゆきさんは高齢者の一人暮らしでもいつも気にかけてくれる人がいる。そういえば、ミツさんは家の固定電話でやりとりしてたね。スマホもなかったら連絡も取れない・・・

M: 市役所の担当者、コールセンターのサポーター、PLAN75を選んだミツさん、最後の施設で対応を任された人。それぞれの選択のその後はわからないまま。みんなの幸せを心から願わずにいられない。

勝手にきさる 81

池谷 麻幸

〈ハルマゲドンと人の幸せ〉

いよいよ世界は全滅戦争に入る様相を呈してきた。Bible の中のヨハネの黙示録の通りである。

人間世界は、小は障害者総合支援法から大はハルマゲドンまで、苦痛と恐怖に満ちている。

然しそれでも人間一人一人は幸せになることができる。それは一般に、その人が色々な人や自然に対する、「愛」(love)を持つこと「愛する」ことによって realize される。“love” は、仏教や儒教では、「慈悲」「仁」である。

〈30 年前の私の想い（今でも通用する）〉

企業などで働いていない自分の人生はもう駄目だ、と思っている無職者は少なくない。職に就いていないことや過労で絶望し自殺する人もいる。しかし、私自身は、自分の生を無職にも拘わらず極めて肯定的に捉えている。少なくとも思想的には、そう生きることが可能なはずだ。

我々は誰でも、世の中に対して独自の役割を与えられている。無職にもその役割が有るのだ。働けないのが現実なら、そういう人達も自己実現を迫及して生きられる世の中を目指すしか、いきいきと生きる道はない。それが私(達)の現実である。物質的・世俗権力的欲望の追求は身の破滅に通じる。私の生の肯定とは、色々な立場の人が互いに自己を実現できる世の中に近づくことに、自ら連なり努力するということである。それなら貧しくても生き甲斐はある。

「働かざる者食うべからず」という世間の通念に自らを委ねて自分を諦めてしまうのはとても楽である。しかしそのような生き方は、この世に生を受けた者としてとてもできない。生というのはそんな型にはまったものではないはずだ。

以上のことについて異論を持つ方も多いだろうが、今の私としては、この方向で希望を持って生きていきたい。

〈生き生き私たちの苦しみ〉

児童刺殺というショッキングな事件がまた起きた。我々にとって辛く悲しいのは、このような事で一般の人々が精神障害を危険視し、地域で生きる我々の生きる場が無くなっていく結果になることだ。我々はこの社会的な問題を少なくとももっと認識すべきである。私は当事者の立場からも、治療処分のような法的措置は必要と考える。またマスコミもタブー視しないで正論を探るべきだ。安定剤 10 回分を服用しても、現実としてあのような犯罪を引き起こす幻覚症状にはならないというような基本的な点を、専門家はもっと指摘すべきではないのか。重大な問題が無視され続けている。これらに私なりにコミットすることから「生き生きと生きる」が始まる。

27

正解者には、世界人権宣言八尾市実行委員会オリジナル缶バッチプレゼント！➡



● ● I N F O R M A T I O N ★ ● ●

獄友

〒581-0004 八尾市東本町3-9-19-312 八尾市人権協会
世界人権宣言八尾市実行委員会 TEL072-924-9853
E-メール oyaoya@oyaoya.org